

夫それ法華經と申すは八万法蔵の肝心、十二部經の骨髓なり。三世の諸仏は此の經を師として正覺を成じ、十方の仏陀は一乗を眼目として衆生を引導し給ふ。今現に經蔵に入つて此を見るに、後漢の永平より唐の末に至るまで、渡れる所の一切經論に二本あり。所謂くやく旧訳の經は五千四十八卷なり。新訳の經は七千三百九十九卷なり。彼の一切經は皆各々分々に随つて我第一なりとなのおれり。然るに法華經と彼の經々とを引き合はせて之を見るに勝劣天地なり、高下雲泥なり。彼の經々は衆星の如く、法華經は月の如し。彼の經々はとうこ灯炬星月の如く、法華經は大日輪の如し。此は總なり。

別して經文に入つて此を見奉れば二十の大事あり。第一第二の大事は三千塵点劫、五百塵点劫と申す二つの法門なり。其の三千塵点と申すは第三の卷化城喩品と申す処に出でて候。此の三千大千世界を抹して塵となし、東方に向かつて千の三千大千世界を過ぎて一塵を下し、又千の三千大千世界を過ぎて一塵を下し、此くの如く三千大千世界の塵を下しはてぬ。さてかえつて、下せる三千大千世界と下さゞる三千大千世界をともに総束おしふさねて又塵となし、此の諸の塵をもてならべをきて一塵を一劫として、經へ尽くしては又始め又始め、かくのごとく上の諸の塵の尽くし經たるを三千塵点とは申すなり。今三周の聲聞と申して舍利弗・迦葉・阿難・羅云など申す人々は、過去遠々劫三千塵点劫のそのかみ、大通智勝仏と申せし仏の、第十六の王子にてを捨はせし菩薩ましましき。かの菩薩より法華經習ひけるが、悪縁にすかされて法華經をすつる心つきにけり。かくして或は華嚴經へをち、或は般若經へをち、或は大集經へをち、或は涅槃經へをち、或は大日經、或は深密經、或は觀經等へをち、或は阿含小乘經へをちなどしけるほどに、次第に墮ちゆきて後には人天の善根、後に悪にをちぬ。かくのごとく墮ちゆく程に三千塵点劫が間、多分は無間地獄、少分は七大地獄、たまたまには一百余の地獄、まれには餓鬼・畜生・修羅などに生まれ、大塵点劫などを經て人天には生まれ候ひけり。されば法華經の第二の卷に云はく「常に地獄に処すること園觀に遊ぶが如く余の惡道に在ること己が舍宅の如し」等云云。十惡をつくる人は等活・黒繩など申す地獄に墮ちて、五百生或は一千歳を經、五逆をつくる人は無間地獄に墮ちて、一中劫を經て後は又かへり生ず。いかなる事にや候らん。法華經をすつる人は、すつる時はさしも父母を殺すなどのやうに、を影びたゞしくはみへ候はねども、無間地獄に墮ちては多劫を經候。設たとひ父母を一人二人十人百人千人万人十万人百万人億万人など殺して候とも、いかなが三千塵点劫をば經候べき。一仏二仏十仏百仏千仏万仏乃至億万仏を殺したりとも、いかなが五百塵点劫をば經候べき。しかるに法華經をすて候ひけるつみによりて三周のしょうもん聲聞が三千塵点劫を經、諸大菩薩の五百塵点劫を經候ひけることを影びただしくを覺ばへ候。

せんずるところは<sup>註</sup> 擗<sup>くぶし</sup> をもて虚空を打つはくぶしいたからず、石を打つはくぶしいたし。悪人を殺すは罪あさし、善人を殺すは罪<sup>深</sup>ふかし。或は他人を殺すは<sup>吠</sup> をもって泥を打つがごとし。父母を殺すは<sup>吠</sup> もて石を打つがごとし。鹿をほうる犬は頭<sup>破</sup>われず、師子を吠うる犬は<sup>はらわた</sup> 腸<sup>腐</sup>くさる。日月をのむ修羅は頭七分にわれ、仏を打ちし提婆は大地われて入りにき。所対によりて罪の軽重はありけるなり。

さればこの法華経は一切の諸仏の眼目、教主釈尊の本師なり。一字一点も<sup>捨</sup>すつる人あれば千万の父母を殺せる罪にも<sup>過</sup>すぎ、十方の仏の身より血を出だす罪にも<sup>越</sup>こへて候ひける<sup>故</sup>ゆへに三五の塵点をば<sup>へ</sup>経候ひけるなり。此の法華経はさてをきたてまつりぬ。

又此の経を経のごとく<sup>説</sup>とく人に<sup>あ</sup>値ふことが<sup>たど</sup>難きにて候。設ひ一眼の龜は浮木には<sup>たど</sup>値ふとも、はちすのいとをもつて須弥山をば虚空にかくとも、法華経を経のごとく<sup>説</sup>説く人に<sup>値</sup>あひがたし。されば慈恩大師と申せし人は、玄奘<sup>げんじょう</sup>三蔵の御弟子太宗皇帝の御師なり。梵漢を空につかべ、一切経を胸にたゝへ、仏舍利を筆のさきより雨らし、牙より光を放ち給ひし聖人なり。時の人も日月のごとく<sup>くぎょう</sup>恭敬し、後の人も眼目とこそ<sup>かつごう</sup>渴仰せしかども、伝教大師これを<sup>責</sup>せめ給ふには「法華経を<sup>ほ</sup>讃むと雖も還つて法華の心<sup>ころ</sup>を死す」等云云。言ふは彼の人<sup>講</sup>の心には法華経を<sup>思</sup>ほむとをもへども、理のさすところは法華経を<sup>指</sup>ころす人になりぬ。善無畏三蔵は月支国うぢやうな国の国王なり。位をすて出家して天竺五十余の国を修行して<sup>極</sup>顯密二道をきわめ、後には漢土にわたりて<sup>渡</sup>玄宗皇帝の御師となる。尸那日本の真言師、誰か此の人<sup>流</sup>のながれにあらざる。かゝるたうとき人なれども一時に頓死して<sup>えんま</sup>閻魔の<sup>責</sup>せめにあわせ給ふ。いかなりけるゆへとも人<sup>故</sup>しらず。日蓮此を<sup>考</sup>かんがへたるに、本は法華経の行者なりしが、大日経を見て法華経に<sup>勝</sup>まされりといみしゆえなり。されば舍利弗・目連等が三五の塵点劫を経しことは十悪五逆の罪にも<sup>む</sup>あらず、謀反八虐<sup>む</sup>の<sup>とが</sup>失にてもあらず。但悪知識に<sup>恐</sup>値ひて法華経の信心をやぶりにて<sup>ころう</sup>権経にうつりしゆへなり。天台大師釈して云はく「若し悪友に<sup>攻</sup>値へば則ち本心を失ふ」云云。本心と申すは法華経を信ずる心なり。失ふと申すは法華経の信心を引きかへて余経へうつる心なり。されば経文に云はく「然も良薬を<sup>しか</sup>与ふるに<sup>しか</sup>而も肯へて服せず」等云云。天台の云はく「其の心を失ふ者は良薬を<sup>あ</sup>与ふと雖も而も肯へて服せず。生死に<sup>じょうぜい</sup>流浪して他国に<sup>ころう</sup>逃逝す」云云。されば法華経を信ずる人のを<sup>思</sup>そるべきものは、賊人・強盗・夜打・虎狼・師子等よりも、当時の蒙古の<sup>攻</sup>せめよりも法華経の行者を<sup>悩</sup>なやます人々なり。

此の世界は第六天の魔王の所領なり。一切衆生は無始已来彼の魔王の<sup>けんぞく</sup>眷属なり。六道の中に二十五有と申す<sup>牢</sup>ろを<sup>構</sup>かまへて一切衆生を入るゝのみならず、妻子と申す<sup>め</sup>ほだしを<sup>こ</sup>うち、父母主君と申す<sup>網</sup>あみを<sup>空</sup>そらにはり、<sup>とん</sup>貪・<sup>じん</sup>瞋・<sup>ち</sup>癡の酒を<sup>飲</sup>のませて<sup>誑</sup>仏性の<sup>本</sup>本心を<sup>誑</sup>たぼらかす。但<sup>悪</sup>あくの<sup>着</sup>さかなのみを<sup>恐</sup>すゝめて三悪道の大地に<sup>伏</sup>伏臥せしむ。たまたま善の心あれば<sup>しょうげ</sup>障碍をなす。法華経を信ずる人を<sup>思</sup>ばいかに<sup>墮</sup>もして悪へ<sup>墮</sup>墮とさんと<sup>思</sup>をもうに、叶はざればやうやく<sup>賺</sup>すかさんがために<sup>墮</sup>相似せる華嚴経へ<sup>と</sup>としつ、<sup>とじゆん</sup>杜順・<sup>ちごん</sup>智儼・<sup>ちごん</sup>法蔵・<sup>澄</sup>澄観等これなり。又般若経へ<sup>かじょう</sup>を<sup>そうせん</sup>としつ、<sup>嘉</sup>嘉祥・<sup>僧</sup>僧詮等これなり。又深密経へ<sup>墮</sup>としつ、

げんじょう  
玄奘・慈恩此なり。又大日經へ墮としつ、善無畏・金剛智・不空・弘法・慈覺・智証  
等これなり。又禅宗へ墮としつ、達磨・慧可等是なり。又觀經へすかしをとす悪友は、  
善導・法然是なり。此は第六天の魔王が智者の身に入って善人をたばらかすなり。法華  
經第五の巻に「悪鬼其の身に入る」と説かれて候は是なり。設ひ等覺の菩薩なれども元  
品の無明と申す大悪鬼身に入って、法華經と申す妙覺の功德を障へ候なり。何に況んや  
其の已下の人々にをいてをや。

又第六天の魔王或は妻子の身に入って親や夫をたばらかし、或は国王の身に入って法  
華經の行者ををどし、或は父母の身に入って孝養の子をせむる事あり。悉達太子は位を  
捨てんとし給ひしかば羅睺羅はらまれてをはしませしを、淨飯王此の子生まれて後出  
家し給へといさめられしかば、魔が王子ををさへて六年なり。舍利弗は昔禅多羅仏と申  
せし仏の末世に、菩薩の行を立て六十劫を経たりき。既に四十劫ちかづきしかば百劫  
にてあるべかりしを、第六天の魔王、菩薩の行の成ぜん事をあぶなしとや思ひけん、婆  
羅門となりて眼を乞ひしかば相違なくとらせたりしかども、其れより退する心出で来て  
舍利弗は無量劫が間無間地獄に墮ちたりしぞかし。大莊嚴仏の末の六百八十億の檀那  
等は、苦岸等の四比丘にたばらかされて、普事比丘を怨みてこそ大地微塵劫が間、無間  
地獄を経しぞかし。師子音王仏の末の男女等は、勝意比丘と申せし持戒の僧をたのみて  
喜根比丘を笑ふてこそ、無量劫が間地獄に墮ちつれ。今又日蓮が弟子檀那等は此にあた  
れり。法華經には「如来の現在すら猶怨嫉多し。況んや滅度の後をや」と。又云はく「一  
切世間怨多くして信じ難し」と。

涅槃經に云はく「横さまに死殃に罹らん、呵責・罵辱・鞭杖・閉繫・飢餓・困苦、  
是くの如き等の現世の輕報を受けて地獄に墮ちず」等云云。般泥洹經に云はく「衣服不  
足にして飲食麁疎なり。財を求むるに利あらず。貧賤の家及び邪見の家に生まれ、或は  
王難及び余の種々の人間の苦報に遭ふ。現世に軽く受くるは斯の護法の功德力に由る故  
なり」等云云。文の心は、我等過去に正法を行じける者にあだをなしてありけるが、今  
かへりて信受すれば過去に人を障へつる罪によて未来に大地獄に墮つべきが、今生に正  
法を行ずる功德強盛なれば、未来の大苦をまねきこして少苦に値ふなり。この經文に過  
去の誹謗によりてやうやうの果報をうくるなかに、或は貧家に生まれ、或は邪見の家に  
生まれ、或は王難に値ふ等云云。この中に邪見の家と申すは誹謗正法の父母の家なり。  
王難等と申すは悪王に生まれあうなり。此の二つの大難は各々の身に当たりてをばへつ  
べし。過去の謗法の罪の滅せんとして邪見の父母にせめられさせ給ふ。又法華經の行者を  
あだむ国主にあへり。經文明々たり、經文赫々たり。我が身は過去に謗法の者なりける  
事疑ひ給ふことなかれ。此を疑って現世の輕苦忍びがたくて、慈父のせめに随ひて存の  
外に法華經をすつるよしあるならば、我が身地獄に墮つるのみならず、悲母も慈父も大  
阿鼻地獄に墮ちてともになしまん事疑ひなかるべし。大道心と申すはこれなり。各々  
随分に法華經を信ぜられつるゆへに過去の重罪をせめいだし給ひて候。たとへば鉄を

よくよくきたへばきずのあらわるゝがごとし。石はやけばはいとなる。金はやけば真金となる。此度こそまことの御信用はあらわれて、法華經の十羅刹も守護せさせ給ふべきにて候らめ。雪山童子の前に現ぜし羅刹は帝釈となり、尸毘王のはとは毘沙門天ぞかし。十羅刹心み給はんがために父母の身に入らせ給ひてせめ給ふこともやあるらん。それにつけても心あさからん事は後悔あるべし。

又前車のくつがへすは後車のいましめぞかし。今の世にはなにとなくとも道心をこりぬべし。此の世のありさま厭ふともよも厭はれじ。日本の人々定んで大苦に値ひぬと見へて候。眼前の事ぞかし。文永九年二月の十一日にさかんなりし花の大風にをるゝがごとく、清絹の大火にやかるゝがごとくなりしに、世をいとう人のいかでかなかるらん。文永十一年の十月ゆき・つしま、ふのものども一時に死人となりし事は、いかに人の上とをばすか。当時もかのうてに向かひたる人々のなげき、老ひたるをや、をさなき子、わかき妻、めづらしかりしすみかうちすてゝ、よしなき海をまぼり、雲のみうればはたかと疑ひ、つりぶねのみゆれば兵船かと肝心をけす。日に一二度山えのぼり、夜に三四度馬にくらををく。現身に修羅道をかんぜり。

各々のせめられさせ給ふ事も、詮ずるところは国主の法華經のかたきとなれるゆへなり。国主のかたきとなる事は、持齋等・念佛者等・真言師等が謗法よりをこれり。今度ねうしくらして法華經の御利生心みさせ給へ。日蓮も又強盛に天に申し上げ候なり。いよいよをづる心ねすがたをはすべからず。定んで女人は心よはくをはすれば、ごせんたちは心ひるがへりてやをはすらん。がうじやうにはがみをしてたゆむ心なかれ。例せば日蓮が平左衛門尉がもとにてうちふるまい、いぬしがごとくすこしもをづる心なかれ。わたが子となりしもの、わかさのかみが子となりしもの、将門・貞当が郎従等となりし者、仏になる道にはあらねどもはぢををもへば命をしまぬ習ひなり。なにとなくとも一度の死は一定なり。いろはしあしくて人にわらわれさせ給ふなよ。

あまりにをぼつかなく候へば大事のものがたり一つ申す。白ひ・叔せいと申せし者は、胡竹国の王の二人の太子なり。父の王弟の叔せいに位をゆづり給ひき。父して後叔せい位につかざりき。白ひが云はく、位につき給へ。叔せいが云はく、兄位に継ぎ給へ。白ひが云はく、いかに親の遺言をばたがへ給ふと申せしかば、親の遺言はさる事なれども、いかに兄ををきては位には即くべきと辞退せしかば、二人共に父母の国をすてゝ他国へわたりぬ。周の文王につかへしほどに、文王殷の紂王に打たれしかば、武王百ヶ日が内いくさををこしき。白ひ・叔せいは武王の馬の口にとりつけていさめて云はく、をやして後三ヶ年が内いくさををこすはあに不孝にあらずや。武王いかりて白ひ・叔せいを打たんとせしかば、大公望せいで打たせざりき。二人は此の王をうとみてすやうと申す山にかくれぬ。わらびををりて命をつぎしかば、麻子と申す者ゆきあひて云はく、いかにこれにはをはするぞ。二人上件の事をかたりしかば、麻子が云はく、さるにてはわらびは王の物にあらずや。二人せめられて爾の時よりわらびをくわず。

天は賢人をすて給はぬならひなれば、天、白鹿と現じて乳をもって二人をやしなひき。叔せいがかく、此の白鹿の乳をのむだにもうまし、まして肉をくわんといみしかば白ひせいせしかども天これをきゝて来たらず。二人うへて死にゝき。一生が間賢なりし人も一言に身をほろぼすにや。各々も御心の内はしらず候へばをぼつかなしをぼつかなし。

釈迦如来は太子にてをさせし時、父の浄飯王太子ををしみたてまつりて出家をゆるし給わず。四つの門に二千人のつわものをすへてまぼらせ給ひしかども、終にをやの御心をたがへて家をいでさせ給ひき。一切はをやに随ふべきにてこそ候へども、仏になる道は随はぬが孝養の本にて候か。されば心地観経には孝養の本をとかせ給ふには「恩を棄てゝ無為に入るは真実の報恩の者なり」等云云。言はまことの道に入るには、父母の心に随はずして家を出でて仏になるが、まことの恩をほうずるにてはあるなり。世間の法にも、父母の謀反などををこすには随はぬが孝養とみへて候ぞかし。孝経と申す外経に見へて候。天台大師も法華経の三昧に入らせ給ひてをさせし時は、父母左右のひざに住して仏道をさえんとし給ひしなり。此は天魔の父母のかたちをげんじてさうるなり。

白ひ・すくせいが因縁はさきにかき候ひぬ。又第一の因縁あり。日本国の人王第十六代に王をはしき。応神天王と申す。今の八幡大菩薩これなり。この王の御子二人まします。嫡子をば仁徳、次男をば宇治の王子。天王次男の宇治の王子に位をゆづり給ひき。王ほうぎよならせ給ひて後、宇治の王子云はく、兄位につき給ふべし。兄の云はく、いかにをやの御ゆづりをばもちみさせ給はぬぞ。かくのごとくたがいにるむじて、三ケ年が間位に王をさせざりき。万民のなげきいふばかりなし。天下のさいにてありしほどに、宇治の王子云はく、我生きて有るゆへにあに位に即き給はずといひて死せ給ひにき。仁徳これをなげかせ給ひて、又ふししづませ給ひしかば、宇治の王子いきかへりてやうやうにをほせをかせ給ひて、又ひきいらせ給ひぬ。さて仁徳位につかせ給ひたりしかば国をだやかなる上、しんら・はくさひ・かうらいも日本国にしたがひて、ねんぐ八十そうそなへけるとこそみへて候へ。

賢王のなかにも兄弟をだやかならぬれいもあるぞかし。いかなるちぎりにて兄弟かくはをはするぞ。浄蔵・浄眼の二人の太子の生まれかわりてををはするか、薬王・薬上の二人か。大夫志殿の御をやの御勘気はうけ給ひしかども、ひやうへの志殿の事は今度はよもあににはつかせ給わじ。さるにてはいよいよ大夫の志殿のをやの御不審は、をぼろげにてはゆりじなどをもいて候へば、このわらわの申し候はまことにてや。御同心と申し候へばあまりのふしぎさに別の御文をまいらせ候。未来までのものがたりなに事かこれにすぎ候べき。

西域と申す文にかきて候は、月氏に婆羅疋斯国施鹿林と申すところに一の隠士あり。仙の法を成ぜんともう。すでに瓦礫をばらなしせろくりんをばらなしせろくりんひとりいんし仙の法を成ぜんともう。すでに瓦礫をばらなしせろくりんをばらなしせろくりんひとりいんし人畜の形をかえけれども、いまだ風雲にのて仙宮にはあそばざりけり。此の事を成ぜんがために一の烈士をかたらひ、長刀をもたせて壇の隅に立てゝ息をかくし言をたつ。よひよりあしたにいたるま

物言物言でものいわずば仙の法成ずべし。仙を求むる隠士は壇の中に坐して手に長刀をとて口取に神呪しんじゆ誦をずうす。約束して云はく、設ひ死なんとする事ありとも物言ふ事なかれ。烈士云はく、死すとも物いはじ。かくのごとくしてすでに夜中を過すぎて夜よまさ明にあげなんとす。いかんがをもひけん、あけんとする時烈士をきに声をあげて呼ばはる。すでに仙の法成ぜず。隠士烈士に云はく、いかに約束を違ばたがふるぞ、口くち惜しき事なりと云ふ。烈士歎いて云はく、少し眠りてありつれば、昔仕へし主人自ら来たりて責めつれども、師の恩厚ければ忍んで物言いはず。彼の主人怒って頸勿をはねんと云ふ。されど又物言いはず。遂に頸を切りつ。中陰ちゆういんに趣く我が屍しかばねを見れば惜しく歎かし。されど物言いはず。遂に南印度の婆羅門の家に生まれぬ。入胎出胎するに大苦忍びがたし。されど息を出ださず、又物言いはず。已に冠者となりて妻をとつぎぬ。又親死しぬ。又子をまうけたり。かなしくもあり、よろこばしくもあれども物言いはず。此くの如く年六十有五になりぬ。我が妻かたりて云はく、汝若し物言いはずば汝がいとをしみの子を殺さんと云ふ。時に我思はく、我已に年衰へぬ、此の子を若し殺されなば又子をまうけがたしと思ひつる程に、声をおこすとをもへばを驚どろきぬと云ひければ、師が云はく、力及ばず、我も汝も魔弱にたぼらかされぬ。終に此の事成ぜずと云ひければ、烈士大いに歎きけり。我が心よはくして師の仙の法を成ぜずと云ひければ、隠士が云はく、我が失とがなり。兼ねて誠いましめざりける事をと悔ゆ。然れども烈士師の恩を報ぜざりける事を歎きて、遂に思ひ死にし書ぬとか書れて候。

仙の法と申すは漢土には儒家より出で、月氏には外道の法の一分なり。云ふにかひ無き仏教の小乗阿含経にも及ばず、況んや通別円をや。況んや法華経に及ぶべしや。かゝる浅き事だにも成ぜんとすれば四魔競ひて成じがたし。何に況んや法華経の極理南無妙法蓮華経の七字を、始めて持たん日本国の弘通の始めならん人の、弟子檀那とならん人々の大難の来たらん事をば、言以をもて尽くし難し。心以をもてを推しはかるべしや。

されば天台大師の摩訶止観と申す文は天台一期の大事、一代聖教の肝心ぞかし。仏法漢土に渡って五百余年、南北の十師、智は日月ひとに齊しく徳は四海に響きしかども、いまだ一代聖教の浅深・勝劣・前後・次第には迷惑してこそ候ひしが、智者大師再び仏教をあきらめさせ給ふのみならず、妙法蓮華経の五字の蔵の中より一念三千の如意宝珠を取り出だして、三国の一切衆生あまねに普く与へ給へり。此の法門は漢土に始まるのみならず、月氏の論師までも明かし給はぬ事なり。然れば章安大師の釈に云はく「止観みょうじょうの明静なる前代に未だ聞かず」云云。又云はく「天竺の大論すら尚其なほの類たくいに非ず」等云云。其の上摩訶止観の第五の巻の一念三千は、今一重立ち入りたる法門ぞかし。此の法門を申すには必ず魔出来すべし。魔競はずば正法と知るべからず。第五の巻に云はく「行解ぎょうげ既に勤めぬれば三障四魔紛然として競ひ起こる、乃至随ふべからず畏るべからず。之に随へば将まさに人をして悪道に向かはしむ、之を畏れば正法を修することを妨ぐ」等云云。此の釈は日蓮が身に当たるのみならず、門家の明鏡なり。謹んで習ひ伝へて未来の資糧と

せよ。此の釈に三障と申すは煩惱障・業障・報障なり。煩惱障と申すは貪・瞋・癡等によりて障<sup>しょうげ</sup>碍出来すべし。業障と申すは妻子等によりて障<sup>しょうげ</sup>碍出来すべし。報障と申すは国主・父母等によりて障<sup>しょうげ</sup>碍出来すべし。又四魔の中に天子魔と申すも是くの如し。今日

本国に我も止観を得たり、我も止観を得たりと云ふ人々、誰か三障四魔競へる人あるや。「之に随<sup>まさ</sup>へば将に人をして悪道に向かはしむ」と申すは只三悪道のみならず、人天九界を皆悪道とかけり。されば法華経をのぞいて華嚴・阿含・方等・般若・涅槃・大日経等なり。天台宗を除いて余の七宗の人々は、人を悪道に向かはしむる獄卒<sup>ごくそつ</sup>なり。天台宗の人々の中にも法華経を信ずるやうにて、人を爾前へやるは悪道に人をつかはす獄卒<sup>ごくそつ</sup>なり。

今二人の人々は隠士と烈士とのごとし。一もかけなば成<sup>ひと</sup>ずべからず。譬へば鳥の二つの羽、人の両眼の如し。又二人の御前達は此の人々の檀那ぞかし。女人となる事は物に随<sup>おとこ</sup>つて物を随<sup>おとこ</sup>へる身なり。夫たのしくば妻もさかふべし。夫盗人ならば妻も盗人なるべし。是偏<sup>ひとえ</sup>に今生計りの事にはあらず、世々生<sup>はな</sup>々に影と身と、華と果<sup>このみ</sup>と、根と葉との如くにておはするぞかし。木にすむ虫は木をはむ、水にある魚は水をくらふ。芝か<sup>ほ</sup>るれば蘭なく、松さかうれば柏よろこぶ。草木すら是くの如し。比翼<sup>ひよく</sup>と申す鳥は身は一つにて頭二つあり。二つの口より入る物一身を養ふ。ひぼくと申す魚は一目づつある故に一生が間<sup>た</sup>はなる事なし。夫と妻とは是くの如し。此の法門のゆへには設<sup>た</sup>ひ夫に害せらるゝとも悔ゆる事なかれ。一同して夫の心をいさめば竜女が跡をつぎ、末代悪世の女人の成仏の手本と成り給ふべし。此くの如くおはさば設<sup>た</sup>ひいかなる事ありとも、日蓮が二聖・二天・十羅刹・釈迦・多宝に申して順<sup>じゆんじしやう</sup>次生に仏になしたてまつるべし。

心の師とはなるとも心を師とせざれとは、六波羅蜜経の文なり。設<sup>た</sup>ひいかなるわづらはしき事ありとも夢になして、只法華経の事のみさはぐらせ給ふべし。中にも日蓮が法門<sup>いにしえ</sup>は古こそ信じがたかりしが、今は前々いひをきし事既にあひぬれば、よしなく謗<sup>た</sup>ぜし人々も悔ゆる心あるべし。設<sup>た</sup>ひこれより後に信ずる男女ありとも、各々にはかへ思<sup>か</sup>ふべからず。始めは信じてありしかども、世間のをそろしさにすつる人々がずをしらず。其の中に返<sup>かへ</sup>つて本より謗<sup>た</sup>ずる人々よりも強盛にそしる人々又あまたあり。在世にも善<sup>ぜん</sup>星<sup>しやうびく</sup>比丘等は始めは信じてありしかども、後<sup>か</sup>にすつるのみならず、返<sup>かへ</sup>つて仏をぼうじ奉<sup>ほう</sup>りしゆへに、仏も叶<sup>あ</sup>ひ給はず、無間地獄にをちにき。

此の御文は別してひやうへの志<sup>たいふのさかん</sup>殿へまいらせ候。又大夫志<sup>ひやうえのさかん</sup>殿の女房・兵衛志<sup>ひやうえのさかん</sup>殿の女房によくよく申しきかせさせ給ふべし、きかせさせ給ふべし。南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経。

建治二年卯月 日

日 蓮 花 押